直接出会ってはいない、のではと思います。つまり、そこで出会っている花は〝本来の花そのもの〟とは全く関係のない、人間が自分勝手に名前を付け価値づけし、対象化した作りもの（虚構物）と出会っているだけだと言えます。

本来、花がそこに有るということは、理由や価値、また名称などとは関係なく有る〝そのもの〟です。それは、この世のすべての物との関わり（土や雨、風や光、寒暖、それに昆虫等々との関わり）に於いて、花は命している〝それ自体〟であるということ。つまり、花がそこに命しているということは、人間の側の一切の思いに先立って、それがそれとして有るということです。この「ある」ことの事実こそ〝命のたぎり〟それ自体にほかなりません。このように一輪の花の〝命のたぎり〟を直接に経験した、或る人は次のように詩いました。

花は黙って咲き、黙って散って行く。
そして再び枝には帰らない。
けれども、その一時一処にこの世のすべてを託している。
一輪の花の声であり、一枝の花の真（まこと）である。
永遠に滅びぬ命の喜びが、悔いなく、そこに輝いている。

「花一輪」柴山全慶

この詩の人は、歪んだ自我で、自分勝手に花についてあれこれと思い計る世界、――「この花の名前は」「いつ頃咲くのか」「原産地は」「値が高いか、安いか」「好きか嫌いか」……などという価値と知識と好みで花を見て、知ろうとする（思い計る）自我が勝手に構築した世界の枠（わく）と

壁を突き抜けたところ、即ち、人が言語で作り出したそれを突き抜けたところで、本来の花そのものの命と素直に（直接）出会っています。つまり、そのものとの間に隔てる何もなく、そのものをありのままに体験しています。その突き抜けたそれが「直接経験」ということです。この直接経験の「場」こそ〝命のたぎり〟として聖書が証示する〝有る〟ということであり、その〝有る場〟がイエスが示された〝必ず成る〟父なる神による「神の支配」その事なのです。

だからこそ、イエスは〝必ず成る〟という〝神の支配〟を示して「思い悩むな」と次のように語られた。

だから言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。……魂は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよくよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父(神)は鳥を養っていてくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あてたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばす事ができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか、野の花がどのように育つのか、よく注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えて明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言って、思い悩むな。それはみな—神の支配に気づかない人々—が切に求めるものだ。あなたがたの天の父(神)は、これらのも

のがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の支配と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自身が思い悩んでくださる。その日の苦労は、その日だけで十分である。

―マタイによる福音書六章三五節以下―

イエスが提示される「思い悩むな」とは、道徳でも倫理でも教訓でもない、ましてや観念的な原理でもない。イエスはどのような場合にも、一度としてそのような自我が作りだす夢のような現実から浮き上がった世界を語られたことはない。もし、イエスの語りを高度な倫理として受け取る人がいるなら、その人はイエスから最も遠い所にいる人であり、ましてやそのようなイエスを信仰の対象とする者は、独善的で観念的な浮き上がり者です。

私たちは目に見える世界だけが現実であり、それ以上、それ以外に現実は無いと思い込んでいます。しかし、思い込んでいる当の現実とは、私たちの自我が構築した憧憬の世界、または言語で造り上げた虚構の世界にしか過ぎないのです。つまり先に述べた自我が作り出した「花」の世界のようなもので、そのような花は現実のどこにも存在しない虚構のそれにしかすぎないのです。本来の花は、無名物それ自身として初めからあり、終わりを突き抜けてありつづける〝命のたぎりその事〟の露(あらわ)れなのです。だからイエスは「空の鳥をよくよく見なさい。」「野の花がどのようにして育つか、よく注意して見なさい。」と言われるのです。「よくよく見なさい。」「よく注意して見なさい。」とは、「始めからあり、終わりを突き抜けて、たぎっている永遠の命を直接(そのまま)悟りなさい。」という意味です。

花が育つそこ、鳥が飛んでいるその場は、人間がその花や鳥をどのように名付け、どのように価値付け、どのように感じるかということとは、全く関係なく、それはそれとして〝そのまま命をたぎらしつつある場〟なのです。つまり、人の思いの枠や壁を突き抜けた世界なのです。だからイエスは「人が思い悩んだからとて、寿命をわずかでも延ばすことは出来ないではないか」と言われる。

鳥も花も、人も、この世の存在物はすべて、時が来て生み出され、それとして有らしめられ、時が来て消えて行きます。そのすべてが命のたぎり(神の支配)の輝きであり、露れなのです。この事実を「神の栄光」と言う。この神の支配の世界を一輪の花の姿に於いて、みごとに見抜き、悟って、詩い上げたのが、先に紹介した柴山全慶氏です。彼は花を見て花を見ず、花の命を直接経験することで、花にあって〝永遠の命の喜びが、悔いなく、輝いている〟その場に自己自身を見出している。だからこそ、イエスは声を大にして提示された。「何よりも先ず、神の支配(命のたぎりその事)を「求めなさい」と。「求めなさい」とは、「直接経験せよ!」ということです。

自我が造り出した憧憬や願望や言語(論理・教義)に囚われ、それを道具として物事を捕まえ知ろうとする(認識しようとする)なら、物事の本当の姿は見えなくなってしまいます。それが証拠に、自我が造り出したそれらのすべては、やがて、跡形も無く消えて無くなります。自我で構築した人生は、過ぎればすべて夢であり幻と化すだけです。その者の肉体の死と共に、この世は消えて無くなり空と化すのです。肉体の死ということで無くならないものが生の根拠でなければ人間の本当の救いはない。

命のたぎりは(神の支配は)天地に充満しています。ここにある、あすこにある、というようなものではなく、万物の内にも外にもたぎっているのです。しかし、そのたぎりは見えません。その意味では命のたぎりは(神の支配は)〝無〟であると言えます。しかし、その無は〝有無の無〟ではなく〝絶対の無〟であり、それは同時に〝絶対の有〟なのです。その証拠に、その無は個物に於いて我々の前に露(あらわ)になるのです。だからこそイエスは「花をよく見て悟りなさい」「鳥が飛んでいることを注意深く見て悟りなさい」と言われたのです。また次のようにも言われた。

イエスは言われた。「神の支配は(命のたぎりは)次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そして穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる、収穫の時が来たからである。

―マルコによる福音書四章二六節以下―

さらにイエスは言われた。神の支配は(命のたぎりは)何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは〝からし種〟のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。

―マルコによる福音書四章三〇節以下―

一粒の植物の種はただの一粒の種にしかすぎない。しかし同時に、一粒の種は永遠に滅びぬ命

のたぎり、神の支配の世界を映し出しているのです。それが一粒の種の声であり、真なのです。その事実に、ただの一粒の種にしかすぎない存在の凄さ、つまり、物が〝有る〟ということの神秘が隠されているのです。しかし、このような言い表しに対して、或る人達は、それは物活論ですね。アニミズムですね。汎心論ですね。などと軽々に分かったように断定し、ときに一笑してかえりみない。だが、イエスに於ける直接経験の世界はそのような観念の遊戯のそれではありません。

この世の物すべては、そして人が得るところのすべては、人の知恵、努力、思惑に先立って、設え、与える大いなる命、即ち神の支配、命のたぎりによって定められ、現成するのです。それは自我の視点から観るとき〝神秘〟なのです。その神秘に気づくことが〝直接経験〟ということです。

イエスの生涯は、「神の支配(命のたぎり)」を、肉体化することで人々に〝確かな現実〟を証示されたのです。この事実をヨハネによる福音書は「ロゴスが肉なる人と成って、わたしたちの間に宿られた。わたしたちは、その栄光を見た。それは、神の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。」と記しています。(ヨハネ一・一四以下)

神の支配(命のたぎり)を直接経験しないままで、ただ聖書の言葉を解釈し、その文字面にとらわれて、そのまま語ることで満足し、またその言葉を反復聞くことで安心する求道を信仰と言うなら、所詮は〝自我の世界〟の内の事にすぎない。

パウロの直接経験と贖罪信仰（二）

パウロに於ける「直接経験」について語る前に、「直接経験」とは何か、ということを少し述べましたが、ここで、もう少し付け加えておきます。

人が何かに気づくとか目覚めるとかいう場合、理屈を通してそこに至るよりも、出来事を通しての場合が多いようです。その意味で、出来事を「体験する。経験する。」ことは、物事を究め、人生を深めて行くためには大切なことです。

体験とは、感覚を通してそのものを肉体化していくことです。したがって、そのものを知るとは、そのものを肉体化することであり、肉体化された事が精神に深化され、それが言語化され、体系化されることによって、はじめて真の知識、真の思想となるのです。そのような知識や思想こそ、その人に変革を与え、創造的な行為へとうながして行くのです。

とにかく、ものごとは理屈から始まるのではなく体験からはじまり、精神に深化され、それが知的に反省されて理屈となるのです。このような順序を間違って、私たちが何かを知ろうとするとき、先ず「理屈」から入り、「理屈」でそのものを掴もうとする。そして、「理屈」で理解することで、そのものを「知った」と思い込んでしまう。しかし、その実、その人は、知るべきその事について、ただ言葉だけで捕らえただけであって、自分に肉体化して知ったのではない。

理屈（言葉）だけで知ったと思う者は、そのことについて頭では納得出来ても、自分に肉体化

したという充足感は持てない。それは、水泳を習うに、畳の上で習ったのと同じです。

しかし一方、体験により肉体化しても、それを「自分の言葉化」出来ないでいるなら、その体験は自覚的に自分のものとすることは出来ないし、社会化されない。「理屈」に拒否反応を持つ人がいますが、「理屈」が悪いのではい。「理屈」だけでものごとを知ろうとし、「理屈」を操ることでものごとを知った、とするその在り方が間違いなのです。「理屈」は結果です。自分に肉体化された事が自分の世界で醸造され、言語化されたものが「理屈」なのです。その意味で、使徒パウロが「心に信じて義とされ、口に言い表して救われる」と語るのは、さすがにパウロらしく的を得ている。(ローマの信徒への手紙一〇章一〇節)

ちなみに「神学する」ということは、さしずめ、体験―直接経験―され、肉体化された自分の信仰そのもの、即ち「心に信じた事」を言語化し体系化する、即ち「口で言い表す」行為であると言えるでしょう。しかし、この場合に於いても、言語化され体系化された理屈だけが独り歩きし、その理屈を、ただの頭だけで理解し論じることで「神学した。神学している。」と言うなら、その人は単なる観念の遊戯、独善的自己満足の域を出ないと言えましょう。それは、所詮、自我の世界内のことがらで、厳密な意味での「信仰」とは関係ないことです。これは、「学」一般に於いても、よくよく注意しなくてはならないことではないのかと凡人の私などが危惧するのは、要らぬ〝おせっかい〟なのかもしれません。ただ、この場合、言えることは、一般の信仰の人が、もし、宗教的な直接経験抜きで、キリスト教の教義(理屈)を宗教家のセンセイから聖書の文字面で教え込まれ、その教義を信じ固執することで、自分の信仰の保証とするなら、それは如何なものかと思います。

〔以上の項については、以下の論述も含めて〝みちしるべ文庫十八〟「わたしの問い続けて来たこと」（巾）―パウロの信仰―八三ページ以下〔パウロの復活のキリスト顕現体験〕の項を参照してくだされば幸いです。〕

×　　×

では、使徒パウロに於ける「直接経験」は何処でどのように起こったのでしょうか。そのことについて彼は自分で具体的に何も語ってはいません。が、使徒言行録には彼の回心の決定的な出来事として復活のキリストの顕現体験を、彼が三度も語ったと記されています。使徒言行録九章一節以下、二二章六節以下、二六章一二節以下です。ここで、その代表的な一つの九章一節以下の記事の一部を紹介しておきましょう。

さて、パウロはなおも主（イエス・キリスト）の弟子たちを脅迫し、殺そうとし意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコ地方の会堂宛の手紙を求めた。それは、キリスト教徒を見つけ次第、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、パウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天から光が彼のまわりを照らした。パウロは地に倒れ、「パウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。わたしはあなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人達は、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えずに立っていた。パウロは地面から起き上がって、目を開いたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。パウロは三日間、目が見え

ず、食べも飲みもしなかった。

—使徒言行録九章一節〜九節—

このような使徒パウロの顕現体験の具体的な語りについて聖書学的な立場から疑義をとなえる学者は多いようです。私にとってはその当否よりも、出来事として語られているその表現に興味を覚えるのです。つまり、「直接経験」とはこう言うことなのだ、ということです。それは「言語の道が断たれている」ということです。言語で説明が出来、了解され、伝わる世界がこの世の人間世界、つまり「自我の世界」です。しかし、宗教的な真実の命の世界は自我の世界を越えている。この世の言語ではとうてい語り得ない言語以前の、言わば神秘的な命の世界なのです。パウロはダマスコ途上で、その真実の命を直接経験したのです。その命の前では、言語も視覚も無化され通用しない。「目も見えず、ものも言えずに立ちつくす」のみです。まさに、言語や文字の枠と壁とを突破して、人の霊魂に直接、キリストそのもの、大いなる命のたぎりそのものの真実が、瞬時に事実としてパウロに肉体化したのです。だからこそ、彼は、その直接経験について自らの言葉で次のように語りました。

御子(キリスト—大いなる命—)をわたしの中に露(あらわ)に(啓示)された。

—ガラテヤの信徒への手紙一章一六節—

キリスト—大いなる命—を「わたしの中に露(あらわ)にされた」状況について、パウロはさまざまな語り方をしますが、次の語り方もその一つです。

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内を照らし、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

―コリントの信徒への手紙Ⅱ四章六節―

いずれにしても、その状況がどうであれ、パウロの内に起こった出来事とは、言語の世界である自我の世界が消滅し言語化以前の大いなる命(命のたぎりの世界)に彼が直接開眼したという事です。これが彼のイエス・キリストの顕現体験であり、直接経験だったのです。

パウロはこのような直接経験によって、律法(聖書の文字面)を遵守することで、自分が神の前に義人たりうると信じて生きていた律法主義的自我(歪んだ自我)の在り方の誤りに気づいたのです。それは同時に、自我を支える本当の主体、つまり大いなる命―キリスト―に開眼させられ、そのことによって、本来的な自我―真っ当な自我―を回復したのです。それは、「わたし(人間)とは、なんと有り難く、素晴らしい存在なのであろうか!」という真実の自己の発見ということにほかなりません。その時、パウロは次のように歓喜して叫びました。

だれでも、キリスト(大いなる命)の中に生きている自分の本当の姿に目覚めるなら、その人は新しく創造された者である。古い自分は過ぎ去った。見よ、新しく成った!

―コリントの信徒への手紙Ⅱ五章一七節―

そして彼は、新しく成った自分の生の現実を鋭く洞察することによって、次のように告白しました。

生きているのは、もはや、わたしではありません。キリスト（大いなる命）がわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるのです。

―ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節以下―

ところが、彼は、さらに一歩進めて次のように言い切ったのです。

わたしにとって生きることはキリストだ！　―フィリピの信徒への手紙一章二一節―

この告白こそ、パウロが長い求道の末に開眼させられた〝本当の自己の生の現実〟だったのです。この生の現実は理念でも観念の産物でもない。現実から浮き上がった観念の世界の事でもない。分からないが、そのように信じ思い込むことでもない。すべての存在の根柢に躍動している真実の命たぎる創造的な〝現場〟に生きている〝真実の自己〟の開眼だったのです。

「わたしにとって生きることはキリストです」と告白するパウロの言葉を聞くとき、人は「キリスト」を対象化した実体だと思います。しかし、ここで言う〝キリスト〟とは、〝大いなる命のたぎり〟、つまり「創造的な〝働き〟」として語られているのであって、〝私が生きている命

の働きそのこと自体"の動的な事としての場のことです。つまり、「わたしが生きている」ということは、まぎれもなく、わたしの生―自我の生―なのだが、その生は自我よりも深い根源的な大いなる命の働き(キリストの働き)に支えられ、担われている生、であるということです。ですから、このような生の現実に気づいた自我は素直に「私は生かされている者です。」と言えるようになり、キリスト者は「私はキリストに生かされている。」と告白するのです。

結局、パウロは、復活のキリストの顕現体験によって、自分の生を支え担っている真実の命を直接経験することで、それまで律法―聖書の文字―に掴まることによって自分を義なる人間として神の前に立てようとしていた律法主義的自我に生きることの虚しさに開眼させられたのです。それは、"律法主義的自我の死"を意味するのです。

では、そのことと彼の贖罪信仰とはどのように関わってくるのでしょうか。

パウロの直接経験と贖罪信仰(三)

パウロに於ける「直接経験」と「贖罪信仰」との関係を考える前に、パウロがエルサレムの原始教団から受けた「贖罪信仰」について知っておくことは大切です。パウロは言います。

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも―エルサレムの原始教団から―受けたものです。すなわち、キリストが―旧約―聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪

―律法違反の罪―のために―キリストがその贖いとして十字架にかかり―死んだこと、―墓に―葬られたこと、また、―旧約―聖書に書いてあるとおりに―墓から―三日目に復活したこと…。

―コリントの信徒への手紙Ⅰ一五章三節以下―

これはパウロが原始教団より受けたイエス・キリストの十字架での死の意味です。つまり、旧約聖書の民が昔、シナイ山で指導者モーセに啓示した民との契約、つまり、神と人との共存の契約のしるしとして、イスラエルの民が守るべき律法(モーセの十戒)遵守の義務に、違反してしまった。それ故に、民は神の怒りの前で滅びなくてはならないその滅びから救うために、神の子キリストを贖い(代償)として神ご自身が立ててくださることで―民の罪を背負い、民に代わって罰を受け、死ぬことで―民の罪は赦されたのだ、ということを語っているのです。

ここで確認しておきたい大切な一つは、罪とは、神と人との契約―律法―に対する違反ということです。

ところが、パウロはローマの信徒への手紙三章二一節以下で次のように語ります。

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますがイエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今ま

で人が犯して来た罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。……イエスを信ずる者を義となさるためです。

—ローマの信徒への手紙三章二一節〜二六節—

このパウロの語りを注意深く読むとき、先に彼が原始教団より受けた、キリストの十字架における贖罪の意味が微妙に変化発展していることに気づきます。

たしかに、「人は皆、罪を犯して—神との共存の契約である律法を守らず—神の栄光を受けられなくなり—神に罰せられ滅びの道を歩んで—いましたがイエス—の代理死—による贖い—贖罪死—の業を通し義とされた」という語りは、パウロが原始教団より受け継いだ教えであります。

しかし、同時に彼は「神の恵みにより」「信じる者」を救うという言い方を加えることによって、「贖罪による義」とは異なった解釈をしているのです。ここのところの深化発展は微妙で注意深く見つめなければなりません。

本来、聖書に於ける「義」とは、人が神との契約(律法)を守り履行することであって、それは律法を遵守する事において成り立つ義なのです。つまり、その構図は「律法と義認」ということです。また、先にも述べましたが「罪」ということも「律法を守らない」というところに生じることであり、「義も罪」も「律法を完全に守る」という前提で成り立つのです。さらに、「キリストに於ける贖罪」ということも、律法を守れず神との契約違反で罰せられ滅ぶる人間に代わって、キリストがその律法違反の罪を引き受け代理死してくださったという「律法義認」を前提に成り立っているわけですから、パウロが原始教団から受けた信仰の内容は律法遵守によって神

に義と認められる律法義認信仰だと言えます。これを理解しやすいように、一つの例えで言い換えれば、百点を採れば合格、百点を採らなければ不合格。だから、百点を採れない者に代わって、ある人がその者の不足する点数を代わって補ってくださることで合格した、というようなものです。この場合、その者の自力であろうが、他の者に補ってもらおうが、結局は、百点を採ることが合格の基準であるある事は少しも変わらない。つまり「百点合格主義」なのです。したがってパウロが受けた原始教団の贖罪信仰の中身は「贖いによる義であり、それは、律法遵守によって神が人を義と認めるという「律法義認」が基本なのだといえます。

しかしパウロは、贖いによって義と認められるという贖罪解釈を「信仰によって義とされる」と再解釈又は深化させたのです。ここのところはとても大切なことなので、もう少しパウロの言葉にしたがって考えてみましょう。先に紹介しましたパウロの言葉をもう一度見てみましょう。

ところが、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信ずることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。

―ローマの信徒へ手紙三章二一～二二節―

彼は、このような「信仰による義」を語る根拠をローマの信徒への手紙四章一節以下でアブラハムの信仰に求めるのです。

では、肉による私たちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。もし、彼が行いに

よって義とされた―律法義認―であれば、誇ってもよいが、神の前ではそれは出来ません。聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。

―ローマの信徒への手紙四章一節～三節―

ここでパウロが強調していることは、アブラハムが神と契約を結んだとき、それを行うか否かという「行いによる義」ではなく神が彼に求めたものは「信仰」なのだ、と。ということは、信仰こそが、神と人との契約関係に於いて神が求めておられることなのだ、ということです。

しかし、ここでもう一度、注意深くパウロの信仰理解を見つめてみますと、一つの矛盾が生じて来るのです。

「贖いによって義とされる」ということと「信仰によって義とされる」ということとは、明らかに、その根拠が違うということです。ところが、パウロに於いては二つが混在して語られている。ここに古来パウロの信仰を厳密に問うて来た人達を苦しめた矛盾があるのです。

パウロの福音理解の中心は「信仰による義認」だと言われており、それは「イエス・キリストの贖いによる救済」を信じる信仰だと、何の疑問もなく受け入れられているのですが、先にも言いましたとおり、そこには根本的な矛盾があるようです。

（この矛盾に注目せず、十字架の贖罪信仰でパウロの信仰を一括りにし、それで良し、とする信仰人が多くいらっしゃるのが今日の日本の教会の現状のようです。）

「贖い」ということも「義」ということも、神と人との契約に於ける律法が前提にあることを「百点合格主義」の例のところで申し上げました。が、「信仰による義」とは、その根拠が「律

法」とは関係ないどころか、むしろ「文字(律法)は人を殺す」(コリントⅠ三・六)律法否定のところで成り立っているのです。

とすると、「信仰による義」という「信仰」と「義」とはそもそも相容れない異質なことなのです。なぜなら、「信仰」とは自力を放棄し否定するところに成り立つものであり、「義」とは神との契約の内容である「律法」を完全に遵守するところに成り立つことだからです。

これらの疑問が、パウロの場合どのようになっているのでしょうか。この素朴な疑問を素朴に、つまり学者さんの真似事ではなく、自分の信仰で語ってみると、以下のようになるのです。

パウロが言う「信仰」の内容は何なのでしょうか。それを理解する手がかりは、彼が長い求道の末にたどり着いた信仰の世界、それは「わたしにとって生きることはキリストだ」(フィリピ一・二一)というところに明らかです。つまり、それは神と人との契約である律法遵守によって救いを得ようと努力していた「律法主義的自我」をキリスト―この世の生も死も突き抜けて創造的にたぎる大いなる命。イエスの復活に於いて示された大いなる命―の中へ投げ入れ、その命に生かされること、がパウロの言う「信仰」なのです。その事を次のように彼は語ります。

キリスト・イエスの中へ浸されたわたしたちは……実に、死への浸しによってキリスト・イエスとともに葬られたのです。それは、栄光によってキリスト・イエスが死人の中から復活されたように、わたしたちも新しい命に生きるためです。……。

―ローマの信徒への手紙六章三節以下参照―

これと同じ内容の事をパウロは彼自身の書簡の中でいろいろと述べています。そして、最後に生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト―大いなる命―がわたしの内に生きておられるのです。

―ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節―

と彼は自分の信仰的実存を告白しました。このような彼の信仰理解は、それが神の律法であっても、この世のどのようなものによっても自分を立てようとしないということ、それを「この世に対して死ぬ」（ガラテヤ六・一四）「律法に対して死ぬ」（ガラテヤ二・一六）と彼は表現します。その結果パウロは、キリスト（大いなる命）に生かされている自分自身に開眼したのです。それは、自分の命の主人が自我ではなく、キリストこそが自分の命の営みの主体であることへの直接経験だったのです。

とすると、パウロが原始教団から受け継いだ「贖罪信仰」において究極的に見出したものは「自我の死」または「自我の放棄」だったのです。つまり、イエスが十字架にかかり民に代わって罪を贖ってくださったから、罪無き者とされた、という教条的、且つ、合理主義的「律法遵守百点主義」ではなく、その実存的な本質は、律法主義的配慮や努力をする事で自我高揚を果たし安心と救済とを得ようとする自我の放棄、自我の死の主体的な経験であり、同時にそれは、十字架にかかり死して葬られ、永遠の命に復活なされたイエス・キリストの命に生かされる者となった直接経験だったのです。この命の経験を彼は次のように言いました。

だれでも、キリスト（大いなる命）を根柢として生かされる者は、新しく創造された者です。古

いものは過ぎ去り、新しくなった。　　―コリントの信徒への手紙五章一七節―

さらにパウロは、このようなキリストの命を直接経験をより深く霊的に主体化し以下のように告白しました。

もはや、生きているのは、わたしではありません。キリスト(大いなる命)がわたしの内に(わたしの主体として生きておられるのです。　　―ガラテヤ二章二〇節―

そして、彼はついに、求道のぎりぎりの言い表しとも言うべき境地を、

『わたしにとって、生きることはキリストです。』と告白しました。

―フィリピ一章二一節―

［ここで言う「キリスト」とは、命のたぎりとしての大いなる命の働き、「創造的な『動』」であり、実体として限定できない。］

パウロの直接経験と贖罪信仰（四）

パウロに於ける「直接経験」と「贖罪信仰」との関係を、私が皆様とご一緒に考えようと思う理由は、学者さんのまねごとをして、パウロについての神学論を展開しようとするためではなく、私が聖書を通してイエスやパウロからいただいた〝人間を活き活きと生かす本当の命〟を、皆様と御一緒に分かち合いたいと願うからです。

生きても死んでも活き活きと生きる事ができる大いなる命―永遠の命―に、すべての人が開眼出来るようにという、神の愛の具現者として、イエスは働き、ご自分を十字架に捧げ、永遠の命に復活なさいました。その復活のキリストの命を直接経験したパウロも、人々が永遠の命に与かり、安心と希望をもって生きることを願い、そのために自分の生涯を捧げ、最後に天に駆け登って行きました。

使徒パウロの関心は、所謂「キリスト教」という宗教を人々に広めるためではなく、すべての人が生きても死んでも活き活きと生きることが出来る大いなる命に与かる、この一点だけを願ったのです。そのために自分が受けたその救いの命を、人々にどのように語り、伝えることが出来るか、ということを熱心に祈り考え努力しました。そのパウロの心情が彼の手紙を読むとき、ひしひしと伝わってきます。

パウロがユダヤの使徒達―原始キリスト教団―から受けた教えを、当時のギリシャ・ローマ世

界の人達、つまり異邦人―異なる文化圏で生活する人達―に伝道するために、どのように語ればよいのかということに苦労したのです。

彼は言います。

わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。

―ローマ一〇・一―

わたしはだれに対しても自由な者ですが、できるだけ多くの人を捉えて救いへ導くために、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を捉え救いに導くためです。律法に支配されている人に対しては、私自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を救うためです。また、律法を持たない異邦人に対しては律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を救いに導くためです。信仰の弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を救いへ導くためです。すべての人に対してすべての人と同じようになりました。なんとかして何人かでも救うためです。人を救うてくださる福音のためなら、わたしはどんなことでもします。

―コリント人へ手紙Ⅰ九章一九節以下―

彼は、熱心なユダヤ教徒であり、同時にギリシャ的な教養を身につけた知識人でした。だからこそ、ギリシャ・ローマの文化圏に伝道するために用いられたのです。ということは、彼にはユ

ダヤ的な精神(ヘブライイズム)とギリシャ的な精神(ヘレニズム)とが混在しており、ヘレニズム的な風土で伝道するとき、その精神の混在が彼の宣教の内容に矛盾する要素を生ましめる一つとなったと言えましょう。

ユダヤ教的な伝統を持たない文化圏に生きる人々に、ユダヤ教的な伝統に生きる人々に語る同じ言葉で語っても、その言葉はそのまま通じることは不可能です。例え同じ伝統に生きる人々との間にあっても相容れず、対立を生むことがあるのですから、事実ユダヤ教徒はキリスト教徒がイエスをユダヤ教の伝統に属するメシヤ(来るべき救い主)として受け容れることに同意していないのですから。

宣教は、言葉に於いてなされるものです。言葉とは、投げ手と受け手との間に交わされるボールのようなもので、或る人が言葉のボールを或る人に向かって投げるとき、投げられた言葉のボールの内容を投げ手と同じ理解に立つ者だけが、その言葉のボールを受け止める事ができるのです。しかし、投げ手と同じ立場に立っていない者にとっては、投げられた言葉のボールを正しく受け止めることはできません。にもかかわらず、そのボールを受け止めよ、受け止められないのは、お前が愚かだからだ、と受け止める者を非難することは誤りであり、独善的なエゴイストだと言えましょう。

受け止める人達の歴史、文化、伝統、習慣、宗教等をまったく無視し、私が投げたボールの中身は最上のもの、絶対の真理だから〝そのままそっくり〟受けなさい、受けないならお前は不幸になる、滅びる、救われない、などと言うなら、それは狂信的独善的な暴力行為であると言えましょう。ひょっとすると、キリスト教会の歴史は、世界の各地で同じことを犯して来たのかも知

れません。この事について私は、以前に「統一化現象」という冊子で語らせていただきました。興味の有る方はご覧くだされば と存じます。また、最近「文明の衝突」というA五版五〇〇ページに及ぶサミエル・ハンチントンの著書の翻訳本が日本でも出版され、いろいろと話題になりましたが、大きく言えば、使徒パウロが異文化の中で宣教するとき苦悩した課題、問題意識に通じるものがあるのです。ちなみに、一九六二年から一九六五年にわたって開かれたヴァチカン公会議以降のカトリック教会は、この問題に真剣に取りくみ、過去を猛省しつつ二一世紀に於けるカトリック教会の宣教のあり方を模索しているようです。一方、一般にプロテスタント教会と呼ばれている諸教会を眺めるとき、私はその在り方に危機感をいだくのですが……。

それにしてもパウロは、自分が受けた宣教のメッセージを伝える相手方に合わせて変化変質させたのではありません。つまり、相手に媚びて相手のお気に入りに即して福音を変質させたのではありません。そうではなくて、自分が受けた救いのメッセージが秘めている本質を鋭く洞察することによって、その福音の本質を相手の言葉で、相手の立場で相手が受容出来るように、自分の受けた福音の内容を再解釈したのです。そのことを私は先に〝深化〟と言ったのです。

パウロが原始教団から受けた救いのメッセージは神との契約である律法に即して生きる事で救いに与かる律法義認からの解放としてのイエス・キリストの十字架の贖罪信仰でした。イエスの十字架の死と復活は、律法義認に生きるユダヤ教から解放する出来事でした。しかし、その救いの福音は、神との契約に基づいて律法遵守に生きねばならないユダヤ教の伝統に生きる民族にとって救いの福音でありえても、神との契約に基づく律法を持たず、その伝統とは直接関係のない異なる伝統や文化や宗教、歴史に生きる異邦人にとっては、決してイエスの十字架と復活とが罪

の赦しであり、贖罪であり、救いになるとは考えられず、福音として受容することは出来ません。少なくとも、その教えをそのまま受容するためには、イスラエルの民の歴史を始めから学ぶことによって、贖罪の意味を理解せねばならないでしょう。しかし、そうして知ることができる救いの論理も、イスラエルの民には納得できても、異なる歴史や伝統、文化や宗教に生きる異邦の民にとっては所謂〝わたしの事〟として受け取る素地は無いのです。ちなみに、日本人にとって一般的には、その教えは、理解できないのです。ヨーロッパやアメリカというユダヤ教(ヘブライイズム)の伝統を背景にもつ人達はともかく、そのような文化的、歴史的な背景とは異なり、且つ、キリスト教的な宗教の伝統を持たない日本人にとっては、キリスト教とは直接繋がりようがないのです。

使徒パウロは、ギリシャ・ローマの文化圏に伝道を始めるときの手掛かりとしたのは、それらの国々に離散したユダヤ教徒が集まる会堂でした。しかし、その伝道が広がるにつれ、さまざまな文化的な背景を持つ人達が加わり、したがってさまざまな衝突が起こり、それらの問題に彼は苦しみます。その様子が「使徒言行録」(言行録が意図的に編集されているにもかかわらず)にかいま見ることが出来ます。そのような問題に直面することで、パウロの福音宣教の再解釈がすすめられてゆくのです。

自分が受けた贖罪信仰をパウロは深化させたと言いましたが、〝深化〟とは、〝その出来事が秘めている事実を深く見極める〟という意味で用いています。

一般的に、教会が「贖罪」ということを語る場合、その内容はとても合理的解釈に堕する傾向があるのではないかと思っています。それは、先に述べました「百点合格主義」の論理です。そ

の論理は言葉の論理として誰にでも理解できる説得力をもっています。しかし、それが「わたしのこと」として受容することにはとまどいを覚えるのではないでしょうか。勿論、何度も教えられているあいだに、その気になったり、なんとなくそのように思ったり、信念として受容したり、私の確信として信じ込んでしまう、ということはあります。が、命の芯から、心の底の底から自然に無理なく、まったく力むことなく、単純にそのように生きられる信仰人として「わたしにとって、生きるはキリストです」と〝あっけらかん〟と思い、語り、日々をそのままに過ごせるようになるでしょうか。

パウロは、そのように生きたのです。イエスはそのような天然自然の生き方の秘密を教え、ご自身もそのように生きられたのです。

パウロの一生を見るとき、律法主義に生きていた時には、徹底した自力、熱烈な修行の日々であったようです。しかし、福音に目覚め、その大いなる命に生きるパウロは多忙であり、さまざまな配慮と緊張の中にあっても、極めて冷静、沈着、平安と喜び、感謝、希望に淡々と日々を過ごしています。彼は言います。「神がお造りになったものはすべて良いものです。感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。」（テモテⅠ四・四）しかし、そのように自分を生かしてくださる復活の命を、人々に分かち与え共にその命に生かされたいと願う思いは、激烈でした。その様子は先に紹介しました彼の手紙に於いて明らかです。そして同じ手紙で彼は言います。

わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられな

いことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。
―コリント人への手紙Ⅰ九章一六節以下―

贖罪信仰には、パウロをこのように生かしめ、告白へと促す命の秘密が隠されているのです。パウロの贖罪の再解釈、深化の内容をもう少し学んでみようと思います。

パウロの直接経験と贖罪信仰(五)

結局、パウロが求めたのは、〝人間が人間になる〟こと、即ち、人間が本来的な人間になることであり、それは、〝神の創造に於ける人間の自然態〟になることです。

復活のキリストに出会って彼が開眼したことは〝もはや、私が生きているのではなく、私を越えたキリスト―復活に於いて啓示された大いなる命―が、私の内にあり、同時に、その命の内にあって生きている私が、本当の私の様態である〟ということです。これを彼は「わたしにとって、生きることはキリストです」(フィリピ一・二一)と言いました。それは、キリスト―大いなる命―こそが自分の生の主体であり、その命に素直に生かされる人間が〝本来的人間〟。さらに、〝人間が人間になる〟ということで、そのように生きることが〝神の創造に於ける人間の自然態〟なのであります。それは、「人間(自分)が、生きているということは、なんと尊く、すばらしいことなのだろうか」という人間(自分)を生かす真実の命についての素直な感動であり、

開眼です。

したがって、信仰とは、神が与えた律法を熱心に守って善い自分(人間)になるとか、神により頼んで自分の安心、安全を求める事ではありません。また、自分の主人は自分であると堅く思い込み、自分の考え、自分の主義や主張、価値観等の正当性の援用として神を持ち出すことでもないのです。そのような立場は、その者の歪(ゆが)んだ自我が生み出す利己主義(エゴイズム)です。その意味で信仰とは自我の延長線上にあるものではなく、むしろ、そのような自我の立場の放棄を意味するものです。このことをイエスは「幸いだ！こころ(自我)の貧しい人(徹底的に放棄する人)」と言い、また「自分を捨ててわたしに従いなさい」と言われた。しかし、多くの人達は、イエスが語られることが理解できませんでした。それは、イエスの言動を自我レベルで受け取ったからです。自我レベルとは自我の感覚や価値意識による認識行為ということであり、そのような人は、自我より深い命の世界が自我を支えているということを知る智慧が無い。その智慧は「聖霊によらなければ、即ち、自我を越えた深みからの促(うなが)しの智慧によらなければ理解出来ない」とイエスは言われた。こうして、宗教家も含めて多くの人々はイエスを誤解してしまった。このことは、現代に於いても同様であって、教会に於いてさえ、聖書の教えを自我レベルの神学、自我レベルの教義、自我レベルの信仰、自我レベルの道徳意識内で行っているにもかかわらず、それに気づかず、神よ！神よ！と言い、聖書、聖書、イエス、イエスと言葉しているように思うのですが……。

パウロの場合もそうでした。自我の内に取り込んだ律法(聖書)理解、信仰、求道であるにもかかわらず、それと気づかず、自分は、誰よりも神に対して熱心に生きているのだと思い込んでい

ました。そのときの自分の求道の様子を彼は次のように記しています。

わたしは生まれて八日目に―律法にしたがって―割礼を受け―神による選民―イスラエルの民に属しベンジャミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人―生粋の神による選民―です。律法に関しては―最も熱烈に神の言葉である律法を守って生きる―パリサイ宗の一員、熱心さの点では律法に反して神を語るキリスト教徒への迫害者、律法の義―律法の一言一言を遵守することについては非のうちどころのない者でした。

―フィリピの信徒への手紙三章五節以下―

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかは聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るために人一倍に熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹底しようとしていました。

―ガラテヤの信徒への手紙一章一三節以下―

このように律法主義に熱烈に生き、キリスト教徒を迫害することを神の正義だと堅く信じていたパウロは、キリスト教徒を逮捕するためにダマスコの町へ赴く途上で、復活のキリスト（真実の命）を直接経験したのです。そのことを、先のガラテヤの信徒への手紙に続けて彼は次のように記しています。

しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、

御心のままに、御子キリストをわたしの内に啓示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようになされた。

―ガラテヤの信徒への手紙一章一五節以下―

復活のキリスト（真実の命）を自分の霊魂に直接経験させられたパウロの内に何が起こったのでしょうか。これについては先に使徒言行録に記されてあるダマスコへの途上での彼のキリスト顕現体験のところで述べたとおりです。が、再度ここでローマの信徒への手紙七章の彼の告白を通して確認しておきたいと思います。

七章七節以下二五節までのパウロの告白は、彼がキリスト者に回心した立場から、熱心なユダヤ教律法主義者として求道していた時の在り方に潜む問題を鋭く洞察し告白したものです。

その問題とは、結論的に言うと、自分(自我)の一切の計らいに先立って〝創造的にたぎっている大いなる命〟即ちキリストの働きを直接経験しないままで、自我による律法主義的努力が自分を正しく生かすのだと思い込んでいたその信仰が、かえって自分の内に傲慢心と他者に対する侮蔑心とを増幅させてしまった。それが律法主義が秘めている問題です。

神の律法が問題なのではない。自分が願う自分を作り上げようとして律法の文字面遵守(律法主義)に励む自我の在り方が問題なのです。それを彼は「文字〔律法〕は人を殺す」（コリントⅡ三・六）と言いました。パウロは自分を救うはずの律法遵守が自分をますます罪へと導くということに気づいたのです。これは一体どうしたことか、彼は次のように言います。

自分の望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする……私は自分の望む善は行わず、

望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪(歪んだ自我)なのです。……「内なる人(本当の自我)」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則(働き)があって理性の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則(自我の働き)の虜にしているのがわかります。

―ローマの信徒への手紙七章二三節以下―

律法とは、もともとキリスト（真実の命）による生が結果としてとる自然な形です。その意味で「律法は霊的な結実である」（一四節）のに、その律法の文字面だけを守り、その文字を拠り所とすることで、神の前に自分を義人として立てようとしていた。ところがその努力は、自分への執着であり、自我高揚への「貪(むさぼ)り」にほかならず、罪を生み、死をもたらすものとなってしまった。しかし、このような歪(ゆが)んだ自我を捨て去ったキリスト(大いなる命の営み)の現場から省みると、律法を守る行いは歪んだ自我(エゴ)による行いにすぎず、歪んだ自我を増幅するだけであり、したがって、人間から人間らしさを失わしめ、非本来的な人間へと脱落せしめるだけだということにパウロは気づいたのです。

ですから、ローマ書七章に於けるパウロの告白の内容は、律法を守れない自己の罪についての告白ではありません。

ここでパウロが提示している問題はとても大切なことです。たとえば、純粋と思われている宗教的な求道が、実は、歪(ゆが)んだ自我の内でのできごとであり、自我膨張の業にすぎないのではないかという指摘です。その事実にパウロが気づくのは彼が復活のキリスト（真実の命）を直接経験

した後のことです。パウロにとって復活のキリストの命の直接経験は自我を越えた世界、即ち、言語や視覚に代表される感覚の世界を越えた、真実の命の現場に開眼したということです。その象徴的な出来事が、使徒言行録に記されているパウロのキリスト顕現体験です。そのことをルカは次のように記しています。

パウロに同行していた人達は、声は聞こえても、誰の姿も見えないので、ものも言えず立っていた。倒れたパウロは地面から起き上がって、目を開いたが、何も見えなかった。

—使徒言行録九章七節～九節—

とにかく、パウロの復活のキリストの啓示体験(直接体験)は、自分(自我)の真の根源的な命との遭遇だったのです。その時、彼の歪んだ自我の世界は崩壊した。それこそ彼の身心は脱落したのです。つまり、自分(自我)の主人は自分(自我)ではない。自分(自我)は自身の能力によって今、生きているのではない。自分(自我)の全存在を支え、自分(自我)を自分(自我)たらしめている本当の命(真実の自己)を直接経験したのです。このことを、イエスは次のように言われた。

自分の命(自我の命)を救いたいと思う者は、それ(本当の命)を失うが、わたしのため(本当の命のため)に命(自我)を失う者は、それ(本当の命)を得る。

—ルカによる福音書一六章二五節以下—

キリストの世界とは、復活によって啓示された真実の命の世界であり、自我(自分)や、万物を成り立たせている根源的な命の世界（大いなる命の世界、真実の自己の世界、神の創造的な命のたぎりの世界、人間を本来的な人間へと開眼させ新しく創り変えてくださる世界、神の愛が満ちている世界）であり、イエスの言葉では、神の支配の世界、または、「お父さん」の世界、だと言えます。その世界についてパウロは次のように語ります。

そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく男も女もありません。あなたがたは皆キリスト・イエスにおいて一つだからです。

―ガラテヤの信徒への手紙三章二六節以下―

さらに次のようにも言います。

だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。……しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方(キリストの世界の働き)によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、権力者も、現在の世界も、未来の世界も、高きにある力も、低きにある力も、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

―ローマの信徒への手紙八章三四節以下―

救いとは、このようなキリストの世界(真実の命の世界)が自我に露になることです。とするなら、使徒パウロが、イエスが十字架にかかり神に代わって罪を贖ってくださった、という贖罪信仰に於いて見出した事は、律法に則して生きねば救われないという〝歪んだ自我の放棄〟だったのです。それを「律法に対して死ぬ」と言いました。(ガラテヤ二・一六)このように自我を徹底的に放棄せしめられたそこで、復活のキリスト—真実の命—を直接経験する。そのとき、「生きているのは、もはやわたし(歪んだ自我)ではありません。キリスト—真実の命—がわたしの内に生きておられる—わたしの主体となっておられる。」という根源的な命の事実にパウロは開眼したのです。それは彼が〝本来的な人間になった〟ということであり、同時に〝神の創造に於ける人間の自然態〟になったということです。そして、そのことをパウロは「信仰によって義とされる」と言ったのです。

まさに〝贖罪と復活信仰〟は、自我の努力によって、自分を完成させようとする〝自我の働き(律法義認)を克服無化〟させ、人間の本来的な命(キリスト)に開眼させる最高の〝方便〟なのだといえます。

キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰(一)

キリスト教の唯一絶対主義とは、イエスに於いてだけ真の神が示され、イエスの生と死(十字

架による死)と復活の出来事に於いてのみ、神による人間の救いは成り立つということ、つまり、イエスこそ唯一の主でありキリスト(救い主)であって、このイエスによる以外に人間の救いはないということです。このような教義を基本とするキリスト教から、他の宗教を見るとき、どの宗教も人間を救うことが出来ない宗教、又は誤りの宗教となり、それはキリスト教の排他的唯一絶対性を意味することになります。

二千年前、使徒ペテロとヨハネがユダヤ教の指導者たちが集まった議会に於いてイエスについて次のように弁明したことが新約聖書使徒言行録に記されてあります。

……ほかのだれによっても、救いはえられません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名(イエス・キリスト)のほか、人間には与えられていないのです。……

—使徒言行録四章一二節—

結局、キリスト教の排他的唯一絶対主義の立場の根拠は〝イエス・キリスト〟をどのように理解するかということにあるといえます。事実、イエスの弟子達がユダヤ教から独立しキリスト教会が生まれたのは、〝イエスを神の子キリスト(メシア・救い主)〟と告白したことに始まります。(使徒言行録二章一四節以下)その結果、教会は外部に向かって十字架につけられたイエスがどうして神の子であり救い主(キリスト)なのかということを弁証しなければならなくなり、新約聖書にある福音書や書簡などの書々が記されるようになったのです。以後二千年のあいだに、特に一五世紀に始まる大航海時代以後〝キリスト教こそ唯一の真の宗教〟として全世界の国々に宣教さ

れてまいりました。その間に所謂「キリスト教の排他的唯一絶対主義」が問われることは少しはあったにせよ、現代のように根本的に、且つ実際的歴史的に問わざるを得ないような状況にキリスト教会が立たされたことはありませんでした。

二〇世紀はキリスト教会にとって自らを反省する世紀であった、と言われていますが、まさにその通りであって、ローマカトリック教会のピウス一二世は就任早々の一九三九年に、西欧のキリスト教文化以外の文化を尊重する、という回勅を出し、さらに、一九六二年から一九六五年にわたって開催された第二バチカン公会議に於いてパウロス六世の名のもとで、現代世界に開かれた教会の刷新を目指した一六の公文書を制定しました。その中の一つ「キリスト教以外の諸宗に対する教会の態度についての宣言」で"諸宗教の中で見出される真実で尊いものを排斥せず尊敬の念を持つ"ことを宣言しました。一方、プロテスタント教会も一九六〇年「教会一致運動(エキュメニズム)や宗教間対話という課題に真剣に向き合うことになるのです。

×　×

それにしても、イエス・キリストの十字架の死の意味をどのように受けとめるべきなのかという、所謂"贖罪論"が歴史的に教会で論じられようになるのは後代のことであって、それ以前にイエス・キリストについて論じられた課題は、"イエス・キリストの神性と人性"についてでした。つまり"イエスが人の子でありながら""神の子"であるとは、どういうことなのか、という問題です。教会はこの問題についてさまざまな論議をなし、その結果ニケア会議(三二五年)を経てキリスト教会全般、即ち、東方正教会・ローマカトリック教会・プロテスタント教会の信仰の土台とされる、キリストは真の神・真の人であるという"神人二性一人格"ということが決定

され、それまでのキリスト論論争に終止符をうつことになったのが「カルケドン総会議」（四五一年）です。それはとりもなおさず、「正統と異端」という枠組みが出来上がったということです。

イエス・キリストをどのように理解するかという論議（キリスト論）については、それぞれ専門書をお読みになればよいし、また、このような紙面で私が語る必要はないと思います。が、イエス・キリストの人格について古代の教会が定義し、正統派キリスト教信仰の基礎となった重要な「カルケドン信条」を参考のため、ここに紹介しておきます。尚この信条は他の信条と比べて、内容が厳密を期する表現となり一般には煩雑（はんざつ）すぎることもあってのことか、他の信条のように礼拝のなかでは用いられたことはないようです。

×　　×

されば我らは、聖なる教父らにしたがい、すべて相一致して、(1)一にして同じき子、(2)神性においても同じく完全、(3)人性においても同じく完全なる我らの主イエス・キリストを告白すべきことを人々に教う。主は(4)真に神にして(5)真に人、同じく(6)理性心と肉体とを持ち(7)神性によれば父と同質（ホモウシオス）、(8)人性によればわれらと同じく同質、(9)罪を除くほかはすべてのことにおいて我らと相似たり、神性によれば万代の前に父より(10)生まれ、人性によればこれらの末の日、(11)神の母、処女マリアより我らのため、我らの救いのため生まれしなり。(12)一にして同じき、キリスト・子・主・独子は(13)混交なく、(14)転化なく、(15)分割なく、(16)分離なく存する(17)二性のうちに認めらるべし。(18)二性の区別は(19)融合によりて(20)取り去られるにあらず。むしろ(21)各性の特質が保存せられて(22)の人格と一の位格のうちに併存し、(23)二つの人格に(24)分離・(25)分裂され

ず(26)一にして同じき子(27)独子、(28)ロゴスなる神、(29)主イエス・キリストにして、預言者らの当初より述べ、主イエス・キリストは自ら我々に教えたまい、また教父らの信条に伝えしがごとし。

(岡部不二夫訳)

×　　×

キリスト者にとって、イエス・キリストの十字架の死の意味は何なのかいうことは信仰の根幹にかかわる大切なことです。しかし先にも記しましたとおり、古代の教会の問題は、イエスの人性と神性についての論議に集中しており、二世紀の末頃出来たといわれる「ローマ信条」に基づき、四世紀頃から西方教会に登場し、現在のプロテスタント教会に於いて用いられている「使徒信条」を見ても、イエスの十字架の死が人間の罪の贖(あがな)いのためだったとは告白されていません。さらに、古代キリスト教最大の神学者、聖書学者といわれ、キリスト教の根本の教義を作り上げたアウグスティヌス(三五四年～四三〇年)に於いても、三位一体論や原罪論、教会論や神の恩寵について論じても、イエス・キリストの十字架の死が人間の罪を贖(あがな)うための出来事であったということはあまり語ってはいないようです。

イエス・キリストの十字架の死が人間の罪を贖うためであったとする贖罪論が、教会の歴史の中で大きく取り上げられるようになるのは十一世紀のカンタベリー大司教アンセルムス(一〇三三年～一一〇九年)のときからだと研究者は教えています。

私自身の信仰にとってのイエス・キリストの十字架の意味付けを述べる前に、現在、イエス・キリストの十字架がどのように理解されているかということを、簡単に述べてみようと思います。が、その解釈、または言い表し方には、神学的な立場によって異なるようです。が、一つの手掛

かりとしてここではグスタフ・アウレン（一八七九年～一九七八年―スエーデンのルター派の神学者―）の「勝利者キリスト―贖罪思想の主要な三類型の歴史的研究―」（訳文、教文館）という書物で述べている「贖罪論」の分け方が分かりやすいと思いますので、その正否はともかく、その類型だけを、不完全ですが簡略して述べます。

彼は贖罪論を〝客観説〟〝主観説〟〝古典説〟の三つに類型化します。

〝客観説〟とは、人間が神の律法に違反し、滅ぼされるべき人に代わって、神の御独り子イエス・キリストがその刑罰を受けることによって、神の正義はつらぬかれ、同時に人は救済された、というのです。この贖罪論は「刑罰代償説」又は「満足説」「充足説」としてプロテスタント正統主義が受け継いだものです。

〝主観説〟とは、イエス・キリストが徹底して自らをへりくだり、その死に至るまで神に従順であったその在り方が、人に応答愛を引きおこし人を愛へと促すことで、神との和解へ導くという解釈です。「道徳感化説」とも言われる。

〝古典説〟とは、イエス・キリストの十字架の死と復活とは、人間の最大の敵である罪と死と悪魔に対する勝利であり、その勝利を人間にもたらした方こそ「勝利者キリスト」であり、それは神ご自身がキリストにおいてなされた贖罪の業であるというのです。―アウレンはこの古典説に立つ―

以上のようなイエス・キリストに於ける贖罪の業が類型化されるのは、いずれも新約聖書が内包しているものであって、贖罪論が多様化するのはそのためです。にもかかわらず、新約聖書の贖罪思想を一意的に固定化することは客観的にはできないことです。ましてや、イエス・キリス

トの十字架と復活というキリスト教会の信仰の基本(アイデンティティ)にかかわる贖罪についての論議は一義的独善的になってはならないと思います。つまり〝キリストの出来事を、これ以外に解釈することは誤りであり、キリスト者として、又キリスト教会として真理からの悪魔的な堕落、非聖書的である〟などと一概に決めつけることは、むしろ非聖書的であると言えましょう。

× ×

聖書の教えを真摯に探究してきた研究者達のたしかな見解の一つは、聖書の教えの内容は多様であり、統一的にとらえることは出来ないということです。例えば、新約聖書二七巻は一人の信仰人によって記されたのではなく、その初めと終わりとの著者の年代は百年の隔たりがあると言われており、従ってそれぞれの社会的文化的、かつ著述事情も少しずつ異なっています。さらに、その内容が神、またはイエス・キリストと個々の人とにかかわる信仰の告白であること、それは神の大いなる命のたぎりに生かされているその者の表現であるということです。と言うことは、その関わりと表現とは多様であっても、そこでもたらされる信仰による結果には本質的に共通性があるということです。では、その本質的な共通性とは何なのでしょうか。

キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰(二)

先に、聖書の贖罪思想の類型化の代表的な一つの例として、グスタフ・アウレンの三類型を紹介しましたが、私の場合は、そのいずれかの類型を自分の福音理解の基本とはしません。なぜな

ら、それらの三つの類型は、いずれも新約聖書が内包しているからです。ですからすべてをそのまま頂けばよいのです。いずれにしても、その一つの立場をもって、"これこそ、イエス・キリストの十字架の受容の仕方である。ここにこそ福音がある"というなら、キリスト教会の教派間に於いて、自己主張、他教派批判が続くのではと思います。私の場合、以前はアンセルムスの刑罰代償説(客観説)の立場を唯一とするプロテスタント・キリスト教で信仰の養いを受けていましたが、現在は"唯一"を越えたところ(相対化したところ)で、聖書を通していただいた命のたぎり、大いなる命を求道悦楽させていただいています。

× ×

私たちにとって、イエス・キリストとは何なのでしょうか。イエス・キリストの生涯、つまり誕生、宣教に於ける数々の出来事と教え、そして十字架の死と復活、新約聖書はそれらのイエス・キリストの出来事と、その出来事に邂逅(かいこう)した人々の生きざまが人間にとって「福音」なのだ、と証示しています。

たしかに、イエス・キリストは二千年も昔に、私たちとは全く異なった伝統と文化と自然的風土に生きた方です。しかし、その生活のスタイル、社会の制度、科学的な技術がどれほど異なっていても、人間として生まれ、互いに関わり、働き、食し、排泄し、愛と悲しみ、喜び、憎しみ、争い等をひきずりながら眠り、目覚め、病み、苦しみ、臥し、老いて、やがて死ぬという人生の繰り返しは、二千年前の人間も今日の人間も基本的には少しも変わってはいません。イエス・キリストは、その人間の生の現場で人々と生活を共にし、人々に生きる勇気と生きる意味、生きる命の根拠とを、日常の現場から提示なされた。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父(神)は鳥を養ってくださる。……野の花がどのように育つか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ……。

―マタイによる福音書六章二六説以下―

×　×

イエスは、人の眼前にくりひろげられる日常的な出来事を見ながら、人が生きている命の根拠を示される。その意味で、イエスは「空の鳥」を語っておられるのではない。また、「野の花」を語っておられるのではありません。空の鳥も野の花も、一時のもの、有限なもの、消えて無くなるはかないものです。しかし、そのはかなきものによって、尽きることのない命を提示される。つまり、相対的なものをとおして、永遠的、絶対的な命を提示なされるのがイエスです。再度申します。鳥は鳥です。花は花です。それらはそれ以上のものでも、それ以下のものでもありません。〝ただ、それだけのもの〟なのです。〝やがて消えて無くなる相対的なただのもの〟です。そして、私たち人間も、それらと同じはかないものとしてこの世の現場に生きているのです。だからこそ、鳥が見え、花を感じることができるのです。

この世のもの、否、この世自体はすべて相対的なはかない出来事なのです。この事実を、しっかりと自覚しておくことは大切なことです。だから使徒パウロは言いました。

この世の事にかかわっている人は、かかわりの無い人のようにすべきです。この世の有り様は過ぎ去るからです。

―コリントの信徒への手紙Ⅰ七章三一節―

パウロは、この世を軽視しているのではありません。この世とはどういうものであり、どういう所かというその事実をしっかり知っておくべきであり、思い違いをしてはなりませんぞ！と言っているのです。つまり、この世は相対的ではかないという事実を指摘しているだけなのです。永遠ではない。絶対ではない。と言っているのです。

また、ヨハネも言いました。

世も世の欲も、過ぎ去っていきます。

―ヨハネの手紙Ⅰ二章一七節―

この世に対して否定的で厭世的なのではありません。この世の事実を素直に明るく見据えなさい。この世は私たちの存在の確かな根拠、不動の支えではないということ、その一点に於いて決して思い違いをしてはなりませんよ、と言っているだけです。ですから、この事実に開眼したパウロは次のように言います。

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目をそそぎます。見えるものは過ぎ去りま

すが、見えないものは永遠に存続するからです。　―コリントの信徒への手紙Ⅱ四章一八節―

パウロが言う「見えるもの」とは〝この世〟のすべてのもののことを言っています。そして「見えないもの」とは〝神の働き〟のことです。しかし、このパウロの言い表しには矛盾があります。つまり、見えるものに目を注ぐ事はできます。が、見えないものには目を注ぐことは出来ません。〝目を注ぐ〟を〝思いを向ける〟としても、見えない神の命の働きに、即ち永遠的で絶対的なそれに、はかなく有限で相対的な人間が、どうして見えない神の働きに思いを向ける事ができましょうか。この世を越え、人の思いを越えた神の命の世界は人間の思いの枠を越えているのですから。その意味で、人にとって神は、永遠とか、絶対者だとか、絶対他者だとか、その他どのような表現であってもそれは所詮は人間の思いの枠内での表現にしか過ぎないのです。とすると、神は人間にとっては〝無〟だとしか言えないのです。その場合の〝無〟とは「有・無」の〝無〟ではありません。なぜなら、その表現自体がすでに〝人間の思いの枠内のもの〟だからです。

「神はあるか」と問われるとき、わたしは「知らん」と言います。又、「無い」と言います。すると、尋ねた人は怪訝（けげん）な顔をして「あなたは牧師でしょう」と。おそらく、尋ねたその人にとっての神とは、この世の有・無に関わるものの横並びの〝ウルトラスーパマン〟のような存在の一つとして客観的に存在している方だと思っているのでしょう。それはその人の観念が作りだした幻想にしかすぎません。その次元では、〝神が有る無し〟の論議は〝有り〟としても、〝無し〟としても、同じくその観念が作り出した幻想です。にもかかわらず、パウロは「見えないも

のに目をそそぐ」と言いました。それはどういうことなのでしょうか。

×　　×

イエスは言われた。なんと幸いなことか！心の貧しい人々は。天の国はその人たちのものである。

―マタイによる福音書五章三節―

「心の貧しい者」とは、無一物の者ということで、「神の前に文無しの無力、頼りにできる何もない者」（織田昭　マタイによる福音書）という意味です。〝わたしにはこれがあるから大丈夫、安心できる、生きて行ける〟という拠り所が無い者、例えそれが自分の宗教的な信仰や信心であっても、徹底的に自分を相対化し自我否定に目覚めた者が「心の貧しい者」ということです。

完全無一物の自分に目覚めたとき、即、そこに初めて、自分の存在の根拠が自然と自我に露（あらわ）になってくる。「ああ、自分は初めから生かされていたのだ！」という本当の命に目覚めるのです、とイエスは言われる。

しかし、人は、心を貧しくすることが、神の祝福に目覚め、与かる条件のように、先のイエスの言葉を受け取ってしまいます。ですから〝どうすれば、心が貧しくなれるのですか？〟と問う。そして、〝私は貧しくなれない、なれない〟と悩む。

いつも、人は〝何かを得るには、何かをしなくてはならない〟という脅迫観念を抱いています。そのような自分を支配しているのが〝自我〟です。自我とは〝人の内にある考える能力（思考、知）・感じる能力（感覚、情）・行う能力（行為、意）を意識して行使している自分（主体）のことです。しかし、この世の根源のところでは、そのような自我の論理は無いのです。

人が〝何かをする。しなくてはならない〟という自我の計らいは第二のことであって、決して第一のことではないのです。人が〝何かをしたから〟生きられるのではありません。〝何もしなくても〟人は既に生かされる命(大いなる命—命のたぎり、神の支配)の内に生きるべくあらしめられている者なのです。この生の事実が第一のことなのです。ですからイエスは存在者の〝この根源的な生の現場〟を示して「なんと幸いなことか！」と言われたのです。

結局、イエスが空を飛ぶ鳥を指さし、野に咲く名もなき草花に目を留めて、人々に促されたことは、この世の諸々の事柄の根柢にあって、そのものをそのものとして生かしている大いなる命のたぎりである根拠、つまり神の支配に、人が開眼することなのです。イエスは単に指さし提示するだけではなく、まさに全身、全存在を指となし、言葉となし、行ずることによって、すべての者の根柢に創造的にたぎる命そのものを証示された。勿論、奇跡と呼ばれる不思議な業も、十字架も復活も、否、イエスの生涯、イエスの存在その事が、この一点を証示する「しるし」にほかなりません。特にヨハネによる福音書に於いてはハッキリ語られているようです。例えば、イエスの不思議な業で無償でパンを与えられた人々が、再びイエスからパンを得ようと必死で追いかけて来た、そのときイエスは厳しく諭された。

はっきり言っておく、あなた方がわたしを捜しているのは〝しるし〟を見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、わたしがあなたがたに与える食べ物である。

—ヨハネによる福音書六章三六節以下—

人は自分の損得計算ですべての事柄に関わる。それが歪(ゆが)んだ自我の働きです。イエスの言動のすべてを〝歪んだ自我〟で抱え込んでしまう。善も悪も正義も不正義も、信仰も不信仰も、神も悪魔も、聖書も聖霊も……すべてを歪んだ自我で包み込むことで、真の意味で神を誤解し見失ってしまう。イエスはこの歪んだ自我の働きをよく知っておられた。だから、次のように言われる。

イエスがエルサレムにおられたが、そのなさった〝しるし〟を見て、多くの人々がイエスを信じた。しかし、イエスご自身は自分を彼らに任されることをしなかった。それは、すべての人のことを知っていたからである。……イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたからである。

―ヨハネによる福音書二章二三節以下―

× ×

歪んだ自我を放棄するとき、創造的な真の命のたぎり、大いなる命が現成してくる。しかし、自我の放棄は、創造的な真の命のたぎりに開眼するとき自ずと生じる。それは同時です。しかし一方、創造的な命のたぎり、神の支配の現実は、自我の放棄以前に既にどの人の根柢にも躍動している。この〝幸いなる命の現実〟がどの人の自我にも露(あらわ)ならしめる〝方便(しるし)〟の最たる出来事こそがイエスの十字架の贖罪(しょくざい)に他ならないのです。

キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰(三)

人間の罪の贖(あがな)いのために〝イエスが十字架にかかって下さったから〟すべての人が救われるのだ、という信仰を、有り難く受入れ、力強く生きておられる信仰人に、わたしは疑義をはさむつもりはありません。なぜなら、私自身もそのような信仰を土台として力強く生かさせていただいていたのですから。

ところが、自分を新生させたと信じているイエスの十字架による罪の贖いという出来事を、私なりに見つめて行くと、その出来事が意味する、または証示することの何たるかが、見えてきたのです。結論を先に言うと、イエスの十字架による贖い死という出来事は、イエスが言う「しるし」、しかも、イエスにとって最大の「しるし」だった、ということです。このことは、先に少し述べたとおりです。

× ×

新約聖書における「しるし」は、特にヨハネによる福音書に於いては、イエスが行った奇跡は神の全能と栄光、そして神の啓示者であることを証示することを意味しています。したがって〝しるし〟が秘めている神の恵みと愛という啓示の内容を、信仰に於いて受けることなく〝ただその出来事だけに〟しがみつき、その出来事を教義に即して信じ込むだけでよしとするなら、それは結局、イエスが行ったパンの奇跡に於いてパンを食べて満足し、それ故に、イエスにパンだ

けを求めて寄りすがろうとした人と同じではないか。（ヨハネ六・二二以下）つまり、そこで起こった〝出来事だけに〟囚われ、その〝出来事〟に寄りかかり、出来事が証示する本質的なことがらを深く悟ろうとはしない、ということです。

その時、イエスが人々に語った言葉をもう一度注意深く聞いてみましょう。

はっきり言っておく、あなた方がわたしを捜しているのは〝しるし〟を見て悟ったからではなく、ただパンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、わたしがあなたがたに与えるたべものである。

—ヨハネによる福音書六章三六節以下—

×　　×

すでに、キリスト教の教義として概念規定してあるイエスの十字架の出来事、つまり、イエスはすべての人々の罪を贖うために十字架におかかりになった、という〝説明付きの出来事〟をそのまま、即ち「イエスが十字架にかかった〝から〟私は救われたのである」とするなら、それは、ただ、既に意味付けされている出来事、即ち教条化された出来事それ自体に囚われ、それを妄信しているだけで、本当に〝しるし〟としてのイエスの十字架の出来事を悟ったとは言えないのではないでしょうか。その結果〝しるし〟としてのパンの奇跡を悟らないで、〝無償でパンを腹一杯食べられた！〟という出来事だけの理由でイエスを追っかける、自己満足追求集団となったのと同じように、「イエスの十字架による贖罪（しょくざい）以外に救いなし！」と自己満足し、〝排他的唯一絶対主義十字架出来事信仰〟を偶像化し、単純に分別なく叫ぶようになってしまうのではないか

と、私自身の十字架信仰を反省して思うのは私の誤解なのだろうか。このようなイエスの十字架出来事理解は、他宗教との対話を排除する独善になると同時に、キリスト教会内に於いては、単純に神の名による〝正統に対する異端という亡霊の構図〟を作ることになり、ヨーロッパ中世における教会権威主義に基づく凄惨（せいさん）な異端審問は言うに及ばず、今日に於いてもその亡霊に教会人は理由無き恐れをいだき、悩まされることになります。正統と異端については後でご一緒に考えたいと思いますが、ここで確認しておきたいことは、結局、イエスもパウロも当時の教条主義的に硬直化した神殿中心の律法主義的ユダヤ教の体制からは〝異端者〟として処刑され告発されたことを忘れてはなりません。使徒言行録二四章五節に於いてパウロは「ナザレ人の異端」として告発されていることに注目しておきたいと思います。その異端告発理由は使徒言行録一五章五節参照。

×　　×

一体、イエスの十字架による贖罪死（しょくざいし）によって私が救われたとはどういうことなのでしょうか。その出来事が秘めている〝しるし〟とは何なのでしょうか。それは、私という人間の生の根拠が私自身にあるのではなく、私が生きているということは、私(自我)を越えた大いなる命に生かされているのだという事実の開眼への方便（しるし）であるということです。

(方便と訳されている仏教の元の梵語の意味は、近づく、到達するということであると仏教辞典にあるが、一般には人々を真実に導くための方法の意味で、種々に用いられているようです。〝方便としるし〟といいことを厳密な意味で比較検討することは、ここではしないで、真実を証示する出来事という意味で、われわれ日本人に親しみのある言葉としての方便に〝しるし〟とい